

平和のバトン

浦添市立港川中学校一年 松根 悠

平和を考える時、まず頭に思い浮かぶのが「沖縄戦」です。今年は戦後七十四年ですが、沖縄には今もなおアメリカ軍の基地が存在しています。

沖縄戦は、一九三一年の満州事変から始まり、日中戦争、アジア・太平洋戦争へと続いた「十五年戦争」の末期に起きた日米最大の戦闘です。戦争の歴史の中でも、沖縄戦が特に悲惨だと言われる理由は、県民の四人に一人といわれるほどのおびただしい数の住民を巻き込んだ日本国内で唯一の地上戦が行われたからだそうです。この小さな沖縄で、悲惨な地上戦が三カ月も続いたそうです。

僕の周りにいる戦争体験者は、父方の祖父です。僕は、祖父から戦争の話を聞いたことがあります。曾祖父は、三十五歳で津堅島の防衛隊として戦争に参加し、アメリカ軍の艦砲射撃によって亡くなりました。曾祖父は津堅島で教師をしていて、子供が四人いました。戦争の時、祖父は四歳で、弟はお墓で生まれたそうです。お墓には、たくさんの方が避難していて、赤ちゃんが泣くと、敵に見つかるので、「墓から出ていけ。」と言われたそうです。

また、曾祖母は、戦争が終わって四人の子供を女手一つで苦勞を重ねて、育てたと聞きました。

僕はまた、曾祖父を求めて「平和の礎」はもちろんの事、津堅島へ渡った事もあります。「平和の礎」に刻まれた「松根源次郎」津堅島の小さな慰霊碑に刻まれた「松根源次郎」それを見て、僕は曾祖父が本当に戦争によって亡くなってしまったんだなと実感しました。

そんな中、「平和の礎」では、平和のヒントを見つけることができました。それは「平和の礎」には沖縄戦で亡くなったすべての戦死者の名前が刻んであるということことです。軍人も民間人も、大人も子供も、敵も味方も平等に名前を並べてあります。その理由は、命の重さには、差別がないからです。僕達人間は、「日本人だ、外国人だ。男だ、女だ。」など、見た目や文化の違い、考え方の違いで差別や争いが絶えません。身近な事でしょうと、いじめもそれにあたります。僕は、生きています。つまり、僕は「命」です。

すべての人々の「命」は、尊くあるべきだと思います。二十四万人余りの戦死者の声なき声を聞きとり、「命どう宝」という沖縄の心のバトンを僕達がきちんと受け取る事が平和へつなげる第一歩なのだと思います。

僕の両親は、僕が小一の時から、慰霊の日になると、「平和クイズ」を出してくれます。母は、「お母さんは、戦争を知らない。知らないから一緒に勉強したいし、一緒に考えたい。」と言いながら、新聞やインターネット、本などから分かりやすくクイズを出してくれます。切り取った新聞記事、本のコピーをノートに貼りつけ、これをヒントに問題に答えるというものです。

例えば、今年は戦後何年か、戦死者数などです。さらには、未だに数多く不発弾が存在するという記事の中から、一度起こした戦争は、その子供、孫の世代にまで影響を及ぼすのだと言う事を教えてくれました。七十四年前に終わった沖縄戦ですが、実際には終わっていない事に気付かされました。そして、最後には必ず、「戦争のない平和な世界にするために、今あなたが出来ることは何ですか。」と僕に問いかけます。ご飯を作るのも忘れる位、集中する事もあり、「もう、これ位いいんじゃないの。」という僕に対して、「一年に一度でもいいから、平和について真剣に向き合ってみよう。」と必死になる両親の姿を見ると、彼らは彼らなりに、平和のバトンを受け取り、そのバトンを落とさないように、僕達に渡そうとしているのだと感じます。

僕はそのバトンを、受け取ろうとしている最中です。七十四年前の悲劇をくり返さないように、戦争から学ぶ、命の尊さ、相手を思いやる心、相手を許す心、それら全てをバトンに込めて、次の世代に渡せていけるように、毎日を大事に生きていきたいです。